

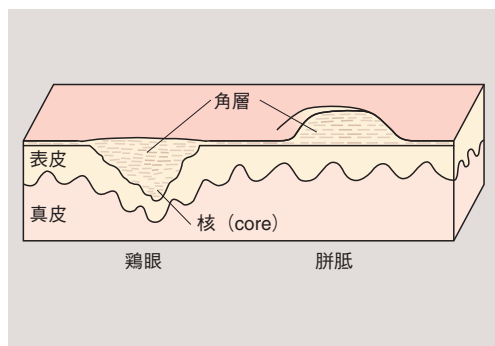


図 15.40 鶏眼, 胼胝の病理模式図



図 15.41 胼胝 (callus, tylosis)

3. 毛孔性角化症 keratosis pilaris

同義語：毛孔性苔癬 (lichen pilaris)

症状・病因・病理所見

上腕や大腿の伸側に、毛孔に一致した正常皮膚色～淡紅色、1～3 mm 大の角化性丘疹が多発する (図 15.42)。軽症も含めると 10 歳代の 30～40% に認められる。多くは学童期から発症し、思春期頃に目立つようになる。丘疹はザラザラした感触をもち、融合や拡大傾向を示すことはない。自覚症状を伴うことも通常ない。病理所見では毛孔が開大し、その中に角栓と捻転毛を認める。遺伝傾向があり、常染色体優性遺伝が推測される。また尋常性魚鱗癬やアトピー性皮膚炎を伴う例もある。

治療・予後

思春期を過ぎると自然消退する。対症療法として保湿剤またはサリチル酸ワセリンなどの外用。

4. 顔面毛包性紅斑黒皮症 (北村) erythromelanosis follicularis faciei (Kitamura)

同義語：erythromelanosis follicularis faciei et colli

耳前部から頬にかけて対称性に紅斑性局面を形成し、その上に毛孔一致性の角化性丘疹を認める (図 15.43)。若年男子に好発する。海外では毛孔性角化症の一型ととらえられており、四肢に毛孔性角化症を合併しやすい。



図 15.42 毛孔性角化症 (keratosis pilaris)

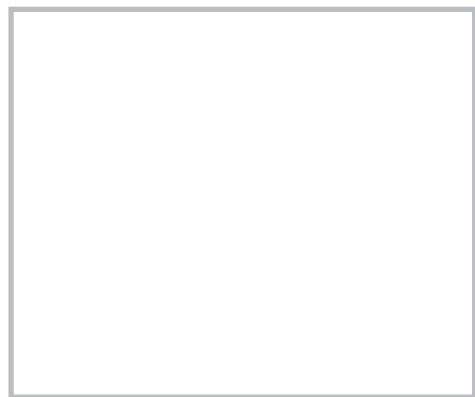


図 15.43 顔面毛包性紅斑黒皮症（北村）〔erythromelanosis follicularis faciei (Kitamura)〕
10 歳代女性。耳前部から頬にかけて毛孔一致性の角化性丘疹による紅斑性局面を認める。

5. 棘状苔癬 ^{きょく} lichen spinulosus

棘状の突起をもった毛孔性丘疹が集簇し、直径 2～5 cm の局面を形成する。若年者の頸部、殿部、腹部などに生じる。病理組織学的には毛孔性角化症と同一。原因不明であるが AIDS や Crohn 病などに続発した報告がある。

6. 黒色表皮腫 acanthosis nigricans ; AN ★

Essence

- 頸部や腋窩に、ザラザラした表面の黒褐色の局面をきたす疾患。
- 内臓悪性腫瘍（とくに胃癌）に合併する悪性型、肥満関連型、内分泌疾患に伴う症候型の 3 型に大別。
- 病理所見では、乳頭腫、過角化、基底層の色素沈着を特徴とし、基本的に表皮肥厚はない。

症状

項頸部、腋窩、^{さいか}臍窩、鼠径部などに、黒褐色のザラザラした乳頭状隆起をきたし、ビロード状あるいはおろし金状の外観を呈する（図 15.44）。内臓悪性腫瘍（とくに胃癌）を合併する悪性型（malignant AN）、肥満者にみられる肥満関連型（obesity-associated AN、以前は仮性型と呼ばれた）、高インスリン血症や SLE などを背景とする症候型（syndromic AN、良性型



図 15.44 黒色表皮腫 (acanthosis nigricans)